

## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# “高校はこうあるべき”から脱し 特別支援教育の視点で学校全体を改革

### — 和歌山・県立 和歌山東高校 —

学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、アスペルガー症候群…  
文科省の調査によると、通常学級で発達障害の可能性のある小中学生は6.5%(2012年)。  
高校にも、発達障害をもつ生徒は少なからず在籍していると推測されます。  
そうした生徒を特別なものとせず、すべての生徒に対する指導に生かした和歌山東高校の実践を紹介します。

取材・文/藤崎雅子

#### 実践のKeyword

🔍 特別支援教育 🔍 特別支援教育コーディネーター 🔍 カウンセラーとの協働  
🔍 教員の共通理解・連携 🔍 授業改革 🔍 朝読書

生徒を切り捨てない学校改革で  
100人近い退学・休学が半減

壁には落書き。器物の損壊。生徒の遅刻、授業中の徘徊、喫煙、けんかは日常茶飯事。授業はまともに行えず、毎年1000人近くが休学・退学、40人以上が留年——7〜8年前までの和歌山県立和歌山東高校はいわゆる、荒れた学校だったという。それが今や、校内の様子は大きく変わっている。生徒の問題行動やトラブルは少なくなり、退学や留年の数は半減した。

変化の理由は、入学生徒の層が変わったからでも、問題のある生徒を退学させているからでもない。特別支援教育の導入と、そこから発展した学校全体の改革——「学校生活によって生徒一人ひとりが良くなることを目指してきた」(校長・萩原勝則先生)という結果である。

ある発達障害生徒の入学が  
教員の意識を変えるきっかけに

同校が特別支援教育に取り組みきつかけとなったのは、2003年度、発達障害をもつ男子生徒Aくんの入学だ。Aくんはいきなり生徒や教員に暴力をふるうことが度々あり、従来であれば停学や退学などになるところだった。

しかし、同年、希望していたスクールカウンセラーが配置され、当時同和教育部だった上西祐子先生は教育相談の担当となった。上西先生らはAくんを医師の受診を促

し、アスペルガー症候群と診断されたAくんを、カウンセラーの力を借りながら生徒を尊重する教育相談の姿勢で指導した。

当時はまだアスペルガー症候群に対する認知度は低く、同校としても初めての事例で、最初は他の生徒や教員から「Aくんを特別扱いしている」と誤解されることもあったという。上西先生はカウンセラーを講師に校内勉強会を開くなど、他の教員とも情報を共有。ある教員が「本校の生徒なのだから、担任や担当者だけでなく、教員全員でかかわってほしい」と発言したことをきっかけに、少しずつ支援の輪が広がっていった。教員のAくんに対する意識は次第に「困った生徒」から「困っている生徒」へと変化。Aくんの特性に合わせた指導を粘り強く続けることでトラブルは減り、Aくんは無事に卒業した。

「Aくんを卒業させられたことは、私たち教員の大きな自信になりました。この3年間は本校の特別支援教育の原点といえるでしょう」(上西先生)

07年度、特別支援教育が法的に位置づけられた改正学校教育法が施行。同年、同校は文部科学省「高等学校における発達障害のある生徒への支援モデル事業」の指定校となった。

これを機に、新たに「保健・人権・特別支援教育部」を設置(図2)。特別支援教育コーディネーター(以下コーディネーター)となった上西先生もこの分掌に所属し、支援が必要な生徒の実態・状況把握や支援方針の検討、校内研修の企画・運営、保護者・



### School Data

普通科 / 1974年創立  
 生徒数 664人(男子352人・女子312人)  
 進路状況(2012年度実績) 大学12.7%・短大7.4%  
 専門学校34.3%・就職34.3%・その他11.3%  
 和歌山県和歌山市森小手穂136  
 TEL 073-472-5620  
 URL http://www.wakayamahigashi-h.wakayama-c.ed.jp/

### Outline

1年次は共通クラス、2・3年次はコースに分かれる普通科高校(経済や商業を学ぶビジネスコース/体育・芸術・家庭を学ぶクリエイティブコース/大学や医療看護系への進学を目指すアカデミーコース)。発達障害のある生徒等に対する個別支援、習熟度別学習や少人数授業による学力向上策、みだしなみ指導や遅刻防止などの生活指導に力を入れている。2012年度に第27回時事通信社「教育奨励賞」優良賞を受賞。

生徒への啓発などを実施。部として組織することにより、校内に特別支援教育を明確に位置づけることができ、保健室との連携や次年度への引き継ぎがスムーズに行われるようになった。

また、09年度からは、上西先生に加えて教頭もコーディネーターの役割を担うことに。「管理職の理解がなければ特別支援教育は広がらない」という強い思いから、上西先生が提案し実現。校内外に対する発信力などの面で効果を発揮している。

こうした教員の意識面、制度面の環境整備の基盤が、現在まで同校の特別支援教育を進展させてきたといえる。

**最も大事なのは  
全教員の共通理解**

現在、同校には発達障害と診断された生徒が15人程度いる。ただし、医師の診断を受けようとしていないケースもあり、実際はもっと多く在籍すると思われる。さらに、発達障害に限らず精神面、学習面、生活面で課題を抱える生徒は多く、全生徒の半数ぐらいいは何らかの支援が必要との見方もある。そんな状況下で、診断の有無にかかわらず、必要な個別支援を行うのが同校の基本方針だ。

実際に個別支援を行っていくうえで最も大事なことは、「職員の共通理解」と上西先生。担当者だけでなく、関係するすべての教員が連携してあたれるよう、同校にはいくつかのしくみがある。

図1 和歌山東高校の近年の動向

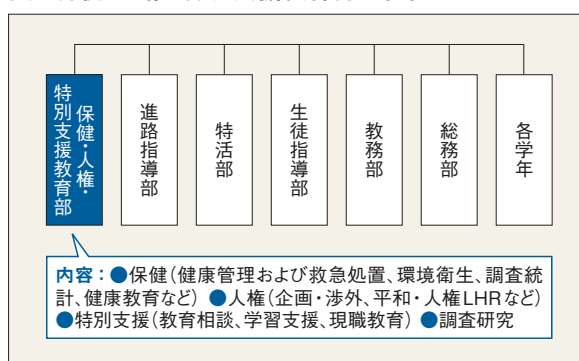
|       |   |
|-------|---|
| 2003年 | スクールカウンセラーが配置される                                      |
| 2007年 | 文科省「高等学校における発達障害のある生徒への支援モデル事業」指定校(～2010年)            |
|       | 「保健・人権・特別支援教育部」(教育相談室を組み入れ)を設置<br>定期考査中に生徒が行う自主勉強会が発足 |
| 2008年 | 1年次3教科学び直し授業を開始                                       |
|       | 2年次からのコース選択制導入(ビジネス/クリエイティブ/アカデミー)<br>「朝の読書」時間を設置     |
| 2009年 | コーディネーター複数制に(教育相談担当者&教頭)                              |
| 2010年 | 「朝の読書」を学校設定科目<br>「教養基礎」として必修化                         |
| 2012年 | 家庭謹慎を廃止し「学校謹慎」を導入                                     |
|       | 時事通信社「教育奨励賞」優良賞受賞                                     |

まずは、同校のスタンスを理解し、特別支援教育に関する知識を得るための教員研修だ。年度初めには、同校に着任したばかりの教員を対象に研修会を実施。同校の特別支援教育の経緯と考え方を共有する。全教員に対しても、外部から発達障害や特別支援教育の専門家を招いて講演会を開いている。

また、支援が必要な生徒の情報収集と教員間の共有は、生徒の入学前から始まる。高校入試の合格発表後、コーディネーターは中学を訪問。支援が必要な生徒について「本人がどんなことに困っていたか」を中心に聞き取ったことを持ち帰り、全教員で共有することで受け入れ環境を整えている。

さらに、不定期に開かれる検討会が2つある。1つは、学校生活全般で支援が必要な生徒について話し合う「教育相談委員会」。コーディネーターのほか、教務部長や生徒指導部長、担任などがメンバーだ。も

図2 保健・人権・特別支援教育部の位置づけ



う1つは授業に特化した「授業担当者会議」で、担任や授業担当者が参加する(図3)。「授業中に不規則発言をする生徒がいる」などのテーマが浮上した時、コーディネーターが内容に応じて関係教員を召



職員室の上西先生の席には、授業の合間に生徒数名が集う。壁に時間割や行事予定表が掲示され、共に確認している



教室とは別の生徒の居場所となる教育相談室。男子と女子で部屋が区切られ、それぞれ気兼ねなく話ができるよう配慮されている

図3 個別支援のための校内組織

| 教育相談委員会  | 授業担当者会議   |
|--|---|
| 個別支援が必要な生徒について、学校生活の様々な角度から支援方法を話し合う<br><br><基本メンバー><br>●特別支援教育コーディネーター<br>●養護教諭<br>●教務部長<br>●生徒指導部長<br>●各学年主任<br>●担任 ●クラブ顧問 | 個別支援が必要な生徒について、授業における支援方法を話し合う<br><br><基本メンバー><br>●特別支援教育コーディネーター<br>●担任<br>●授業担当<br>●クラブ顧問 |

同校には、支援が必要な生徒にとって大切な、居場所が2つある。教育相談室と職員室だ。

教育相談室では、保護者、教員も含め年間約400件の相談が行われる。一般的にカウンセリングはカウンセラーと1対1で行われるものだが、同校の教育相談では常に上西先生が同席している。それにより、上西先生経由で関係する教員との連携がスムーズに行われる。また、週1回程度のカウンセラー出勤日以外は上西先生が対応することで、切れ目のない対応が可能。

年400件のカウンセリングにコーディネーターも必ず同席

集。年10回以上、状況の共有および対策について話し合っている。

こうした工夫により、多くの教員が特別支援教育への理解を深め、主体的に生徒にかかわっている。「Bくんのケース」参照

Bくんのケース

指示がなくても教員全員がフォローに動く

アスペルガー症候群とみられる特徴のあったBくんは、人とのコミュニケーションが苦手だ。授業中も出歩き、感情が爆発するとクラスメイトに暴力をふるったり、物を壊したり、トラブルが絶えなかった。しかし、そんな時も同校の教員はBくんを頭ごなしに怒ることはしない。普段から共有している対処方法に則り、Bくんに寄り添って対応する。上西先生とは、しばしば時事問題をテーマに議論を楽しむほど打ち解けていた。

ある日、学校で暴れ、手がつけられない状態になったBくん。校内をうろついたら、自宅に向かって自転車を押しながら歩き始めた。徒歩で3時間ほどの距離がある。もし長い下校中に何かあったら…。誰が指示したわけでもないのに、20人ぐらいの教員が動いた。分担して通学路の各ポイントを見守るなか、Bくんはそんな教員に暴言を吐きながらも、大きな問題を起こすことなく家にたどり着くことができた。

結局、Bくんは1年生を3回繰り返して、3年めに中退。最後には「お礼を言いたい」と職員室を訪れた。Bくんにとって同校の教員の対応は、中学までとは少し違ったようだ。「和東の先生は先生らしくない」というBくんの発言を、上西先生は「Bくん特有の褒め言葉」と受け止めている。

支援が必要な生徒を見逃さず進路先に申し送る

こうした居場所により高校生活での問題は減っているが、卒業後についてはまだ課題が多い。近年、大学では発達障害を抱える学生の支援に、サポート担当者や配置するなどの取り組みが進んでおり、大学進学希望者の指導は比較的スムーズだという。しかし、職業に直結する専門学校や企

能。全相談の6割弱はカウンセラー不在時のものという状況からも、教育相談室の活用状況がうかがえる。

また、この教育相談室は、教育相談が行われていない昼休み、教室で過ごすことが難しい生徒の居場所としての役割もある。そこで彼らは、他者との付き合い方を学び、励まし合いながら高校生活を送り、3月には相談室の卒業式も行われる。

そして、教育相談室とともに生徒の居場所となっているのが職員室だ。授業の合間、数名の生徒が安らぎを求めて、職員室の上西先生の机付近にやってくる。ある自閉傾向のある生徒に、「パニックを起こしそうになったらここにきて」と提案したことから始まった支援だ。各自、上西先生のもとで気持ちの切り替えや立て直しを図ってから、次の教科担当の教員と共に授業に向かう。

「これは生徒にとつての効果だけでなく、職員室にいる先生方にとつても、支援の必要な生徒の状況がみえるという効果があるようです」(萩原校長)

業への接続では難しさにぶち当たることも。そこからさまざまな教訓を得ている。

例えば、対人関係に問題のある生徒が看護の専門学校に進むといったミスマッチが起きないように、まずは教員が支援を必要とする生徒を見逃さないことが大切だという。また、就職する際、支援が必要な状況であることを隠しているとあとでトラブルになりやすい。あえて事前に医師の診断や療育手帳の取得を行ったほうが、特性を受け入れてくれる就職先などをあつせんしやすいくという。就職指導にもコーディネーターがかかわり、共同作業所を紹介することでもうまくいった例もある。中学まで見過ごされてきた自分の苦手な面を把握して適した進路に進む生徒や、やりたいことをみつけて卒業していく生徒も出ている(Cさんのケース参照)。上西先生は特別支援教育をこうとらえる。

生徒指導を見直し独自の「学校謹慎」を導入

同校では、こうした個別支援の視点を一部の対象生徒にとどめていない。学校全体の生徒指導や学習指導のシステムづくりを生かし、どんな生徒にも1人ひとりを大切にしている姿勢であつている。

「特別支援教育とは、特別な生徒を特別に教育することではなく、生徒一人ひとりがかけがえない存在であるということ。生徒自身も教員も認識し実感できる教育、ではないでしょうか」(上西先生)

業への接続では難しさにぶち当たることも。そこからさまざまな教訓を得ている。

例えば、対人関係に問題のある生徒が看護の専門学校に進むといったミスマッチが起きないように、まずは教員が支援を必要とする生徒を見逃さないことが大切だという。また、就職する際、支援が必要な状況であることを隠しているとあとでトラブルになりやすい。あえて事前に医師の診断や療育手帳の取得を行ったほうが、特性を受け入れてくれる就職先などをあつせんしやすいくという。就職指導にもコーディネーターがかかわり、共同作業所を紹介することでもうまくいった例もある。中学まで見過ごされてきた自分の苦手な面を把握して適した進路に進む生徒や、やりたいことをみつけて卒業していく生徒も出ている(Cさんのケース参照)。上西先生は特別支援教育をこうとらえる。



特別支援教育  
コーディネーター  
上西祐子先生



校長  
萩原勝則先生

## Cさんのケース

### 仲間を得て、自信と社会性をもつように

当時1年生だったCさんは、文化祭の日、一人で校内を回っていた。それを相談室を居場所としていた生徒たちが目撃。「あの子はきっと友達がないんだ。相談室に誘ってあげよう」と声をかけ、Cさんは相談室通いの仲間に加わった。それを上西先生がCさんの担任に伝えたところ、Cさんは入学以来、教室で一言も声を発したことがない場面緘黙(※)であることが判明。聞くと、過去にいじめられた経験から、誰ともかかわらないと決めていたという。それが、相談室では仲間や上西先生と話せるようになり、さらに大きく変化していく。

少しずつ自分の気持ちを表現できるようになったCさんは、ある時、自分の経験をもとに詩を書き、それがコンテストで入賞。その表彰式で、大勢の前で自作の詩を披露することになった。Cさんが最も苦手とすることである。「では練習しよう」と、職員朝礼で全教職員を前にリハーサルを実施。多くの教員を驚かせた。もちろん本番も大成功だ。

高校生活で少しずつ自信が回復し、社会性を身につけていったCさんは、詩について学ぶため大学に進学。寮生活も経験し、充実した大学生活を過ごしている。

※言語能力はほぼ正常にもかかわらず特定の場面では話せなくなる状態

「○○くんにとって良い対応は、他の生徒にとっても良い対応である場合が多いもの。特別な○○くんだけのこととして終わらせるのではなく、同時に全体としてどうあるべきかも考えていく必要があります」(萩原校長)

かつて学校全体として最大の課題だったのは生徒指導である。この数年で改善してきた背景には、PTAの協力による登校時の頭髪指導、遅刻防止につながった朝読書の必修化(5日間で1単位の学校設定科目)などとともに、日々の生徒指導の姿勢が特別支援の視点に基づいて変化した点も大きい。

例えば、授業中に廊下に出ている生徒をみつけた場合、よくあるのは「こら、何しているんだ」と怒るという例だろう。しかし、同校の教員は「どうしたの」と状況を確認することから始める。その生徒は、A/DHDのため席にいることに耐えられなくなったなど、何か事情があるのかもしれない。

いからだ。あるいは単なるサボりかもしれないが、どんな生徒に対しても上から頭ごなしに決めつけるのではなく、まずはその子の事情を理解することから始める姿勢であたっている。

昨年度からは、問題行動を起こした際の指導内容・方法を変更。これまでの「家庭謹慎」を廃して同校独自の「学校謹慎」に切り替えた。通常の学校謹慎と異なるのは、別室で指導を行うのではなく、全授業への出席と放課後50分間の学習や作業を義務づけていること。授業態度は毎時間カードでチェックし、昼休みと放課後に生徒指導部が振り返り指導を行う。日中は保護者不在の家庭が多いことに配慮し、徹底的に教員がかかわることで乱れがちな生徒の生活を整えるのがねらいだ。遅刻の常習者だったある生徒は、この独自の学校謹慎を受けてから、「どうも毎朝決まった時間に目が覚めてしまう」とぼやいたという。

## 小学校の指導法を参考に 誰にとってもわかる授業へ

学校全体では学習面の課題も大きい。中学までの学習が十分に定着していない生徒や、学習習慣が身につけていない生徒が少なくないが、やはり個別支援から始まった取り組みにより、良い兆しがみえ始めた。例えば、個別生徒に関する情報交換と対策のための授業担当者会議は、全体の授業改善につながっている。会議ではまず個別生徒について「○○くんがわかるように整理して板書する」「授業中は意識して○○くんを声をかける」などの対策があるが、「この対策は○○くんだけでなくみんなにとっても良いことでは」と考えるきっかけになるという。こうした話し合いから習熟度別授業や少人数授業、学び直しの特別授業などが導入されてきた。

すべての生徒の基礎学力の定着のためには、小学校の授業を参考にすることもある。数年前、掛け算九九があやふやな生徒に教えるため、「小学校ではどのような教え方をしているのかみてみたい」と数人の教員が近隣の小学校の授業を参観。教材の提示、発問や板書の方法、授業の組み立てなど、授業力向上につながる多くのヒントが得られ、「生徒の学び直しは教師の学び直し」と実感したという。その後も何度か小学校の授業参観に出かけている。

以前、定期考査中の放課後の校舎は早々に静まり返っていたが、今は遅くまで各教室に生徒の姿がある。あちこちで自主勉強会

が開かれているのだ。学習上の支援を必要とする生徒のために補習授業を行う際、「なぜ自分だけ」とプライドを傷つけないように他の生徒にも呼びかけた結果、クラスや学年単位の勉強会に波及したという。

「頑張りが点数に反映される喜びを感じると、どうでもいいと思っていたテストの点数を気にするようになります。勉強に対する意識が変わってきたよです」(上西先生)

●

現在の同校には、かつて日常的だった喫煙や暴力などのトラブルが減り、茶髪の生徒はいなくなった。「茶髪=怖い」と外見だけで判断しがちな自閉傾向の生徒も、穏やかな気持ちで過ごせているという。

「最近では、授業の合間に憩いを求めて職員室にやってくる生徒が減っています。教室が十分安心して過ごせる空間になってきたのではないのでしょうか」(上西先生)

かつては部の熱心な生徒のみで淡々と行われていた文化祭や体育祭に、今は全員が役割をもって生き生きと参加していることから、同校の活性化が実感できる。一人ひとりを大切に、時には学校謹慎や小学校参観などの高校では珍しい取り組みも行ってきた結果といえそうです。萩原校長はこう語る。

「高校進学率が低かった時代と違い、『高校教育はこういうものだ』『高校生はこうあるべきだ』は通用しません。いろんなタイプの高校生がいる現在、どんな生徒も切り捨てない方法を、常識にとらわれず行っていく必要があるのではないのでしょうか」